

繁殖成績の良し悪しは、栄養の充足や環境、発情の発見、授精のタイミングなど多くの要因が関与しています。それだけに、牛群の分娩後初回授精日数や授精回数、空胎日数、分娩間隔などの繁殖成績を改善するには、以下のように個体の観察、病歴や検定成績の把握が重要となります。

まず、繁殖上の要注意牛を定めます。過肥牛、難産牛、双胎妊娠牛、代謝病（乳熱、後産停滞、脂肪肝、ケトosis、四変）や感染病（乳房炎）の罹患牛などです。これらの牛は受胎に手こずることを予想し、分娩前から経過を良く観察し、食滞や発熱などに早期に対応する必要があります。そして無理なく乾物摂取量、濃厚飼料給与量を高めることが重要です。無理なくとは、第一胃の恒常性を保つことを意味します。対応方法としては、給与回数を増やしたりや飼料を混合するなどです。

さらに泌乳初期の牛群検定では個体の乳成分率に注目します。日本飼養標準には、蛋白質率が2.9%以下の場合に繁殖成績の空胎日数と授精回数が増すという記述があります。また、乳脂率が5%以上の個体は肝細胞の機能低下が疑われます。これらの牛についても繁殖上の要注意牛に含め、授精、受胎に向けた万全の対応が求められます。また、受胎が確認された牛についても空胎日数が長引いてしまった場合は過肥に気をつけ次産の分娩を迎えることが大切です。